

尾崎一雄全集

第十三卷

筑摩書房

尾崎一雄全集第十三卷

昭和五十九年十月三十日初版第一刷發行

著 者 尾 崎 一 雄

發行者 布川角左衛門

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—九一

電話 東京(291)七六五一(營業)

東京(294)六七一一(編集)

振替 東京 六一四一二三

印刷 株式會社精興社

製本 株式會社鈴木製本所

落丁・亂丁本はお取替致します

目次

あの日この日上

一——二	父の死（大正九年）	五
三——五	早稻田高等學院入學（大正九年） 徴兵検査	三
六——八	學院時代の生活 同覽雜誌『極光』とその仲間 「田川君の話」を書く 山口剛と片上伸	三五
九——十	胸部疾患・休學 妹の發病（大正十年）	五〇
十一——十三	『學友會雜誌』發行 妹の死（大正十一年）	五五
十四——十六	志賀直哉「大津順吉」とのめぐり合ひ 雜誌『白樺』を初見 夏目漱石の死（大正五年）	六〇
十七	志賀直哉へ書狀 その返書（大正十二年）	六五
十八——二十	志賀直哉訪問 瀧井孝作に逢ふ 有島武郎の死 （大正十二年）	七〇

二十一——二十二	九三
外祖父の死（大正十二年）	
二十三——二十九	一〇〇
關東大震災、その被害狀況（大正十二年）	
三十一——三十二	一三一
災後八日目、徒歩にて上京 東京の慘狀をつぶさに見る 志賀直哉「震災見舞」、瀧井孝作「異臭」（大正十二年）	
三十三	一四〇
山口剛の震災體驗記「火をくぐりて」	
三十四——三十六	一五三
「二月の蜜蜂」の初稿「憶ひ出したこと」 何者と も知れぬ大いなる力への畏怖と憤り	
三十七	一六三
「田川君の話」「憶ひ出したこと」の切抜を持つて 山科に志賀直哉訪問、二作に目を通して貰ひ、自 信を得る（大正十三年）	
三十八	一六九
學部國文學科に進む（大正十三年）	
三十九	一七四
滿洲王族、朝鮮貴族の友（大正十三年）	

四十		一〇
『不二』『文藝時代』『文藝戦線』の創刊（大正十三年）		
四十一		一六
山科での松茸狩、柳兼子の歌（大正十三年）		
四十二—四十五		一五
初めての同人雑誌『主潮』創刊 同人雑誌大いに興る（大正十四年）		
四十六		二三
『主潮』好評		
四十七—四十八		三八
片上伸に痛罵される		
四十九—五十一		三六
幼年期のこと（宇治山田時代）		
五十二—五十三		四五
祖父、祖母、父、母		
五十四—五十七		五五
沼津から下曾我へ		
五十八—六十		六三
中學校時代（大正元年—六年） 校長阿部宗孝、		

教諭小林好日、武田祐吉、佐々井信太郎 東條英
教の講演

六十一——六十五……………三〇〇

作文「なだらかな丘」とある少女 閑院宮春仁王、
縣知事有吉忠一、横綱太刀山「わがふるさと・
わが母校」

六十六……………三三

片上伸と志賀直哉、齋藤茂吉

六十七……………三六

生意氣な同人雜誌『主潮』 尾崎士郎とのやり合
ひ 和解（大正十四年）

六十八……………三四

奇妙な引越 小宮山明敏の咯血 杉阪幸月の發病
淺見淵との接觸

六十九……………三五

丹羽文雄との接觸『主潮』と『朝』合併して『文
藝城』を興す 丹羽を『街』の同人に推薦 丹羽
の「秋」好評（大正十五年）

七十——七十二……………三六一

『新潮』新人號に、淺見淵、尾崎一雄、木村庄三
郎、坪田勝、林房雄、藤澤桓夫、舟橋聖一ら登場
（大正十五年）

七十三 三七八

『新潮』の「新人の觀たる既成文壇及既成作家」
座談會で、プロレタリア派新人意氣軒昂（昭和二年）

七十四—七十六 三六三

早稻田大學卒業 S女とのかはり合ひ 謝恩會
のあとの一景 加能作次郎

七十七—七十八 四〇五

學校時代の回顧 バア、寄席、芝居、女義太夫
志賀直哉と女義太夫

七十九—八十二 四三二

濫讀時代 古本屋廻り その相棒中谷博、山崎剛
平「式雄藏書」の印

八十三 四五二

『新正統派』創刊 片岡鐵兵とのやり合ひ（昭和三年）

八十四—八十八 四五六

S女と結婚 芥川龍之介の死 沓掛に志賀直哉訪
問『新正統派』の低迷『文藝都市』の創刊（昭和二—三年）

八十九 五〇〇

志賀直哉、中谷博、相次いで逝く（昭和四十六年）

九十一——九十一……………五〇五

早稻田系同人『文藝都市』を脱退（昭和三年）

九十二——九十三……………五八

逸見廣、谷崎精二の死（昭和四十六年）

九十四——九十五……………五三

家没落す S女との溝深まる（昭和四年）

九十六——百……………五四

奈良での生活 志賀直哉を圍む人々 深夜の淺茅

ヶ原、鷺池

百一——百二……………五四

S女來る 丹羽文雄來る

後記……………五九

尾崎一雄全集
第十三卷

あ
の
日
こ
の
日
上

一 父の死（大正九年）

期間とか枚数とかを窮屈に考へず、氣ままに書いてみないか、といふことである。大體窮屈なことは好きでない方だが、それがために却つてその方へ自分を追ひ込む場合も無くはない——経験で、ときどきそんな状態に陥ることがあるのを知つてゐる——から、今はゆつくりやらうと思つてゐても、いつ、急に端折り出すか、自分でも見當がつかねる氣持である。

振り返つてみると、誰でもさうだらうやうに、私の時間の経過にも、山といふか曲り角といふかところどころに少し目立つ時期がある。時間といふものは平均的に流れず、遅速濃淡がある、といふことなのだらう。

さういふ意味で私の目の前に先づ出てくるのは、大正九年（一九二〇）といふ年だ。それにともなつて、大正五、六年、また大正十二年といふのが出てくる。

私は一八九九年のクリスマスに生れたから、大正九年には滿二十歳になつてゐた。それ以前のこと「文學的自傳」といふ以上書かねばならぬけれど、今は大正九年の方へ頭が向いてゐるので、先づここ

から書き出さうと思ふ。それより前のことは、適宜織り込む、といふことにしたい。

この年の二月十日、父八束が満四十七歳で死んだ。母タイ（四十二歳）、私（二十歳）、妹セイ（十七歳）、弟弘夫（十四歳）、妹エイ（十一歳）、弟正男（八歳）の母子がのこされた。

おもな親戚としては、母の實家（當時静岡縣駿東郡沼津町三枚橋山王前。現在の呼稱沼津市平町）に母の父川口信之（六十七歳）が、神奈川縣中郡大山町（現在伊勢原市大山）には、先導師であり郵便局長である尾崎家に嫁いだ父の姉レム（五十二歳）があつた。信之はすでに妻（私の外祖母）をうしなつて居り、レムは寡婦であつた。

信之とその長男辰男（母の弟、三十四歳）、レムの三人は、葬式にやつてきたが、そのとき、母と私に、あとは大丈夫かと訊いた。二人とも、自家の經濟のことは全く知らなかつたので、即答ができなかつた。調べてあとで報告します、といふよりほかはなかつた。三人は、困つたことがあれば、何なりと言つて來い、と私に言つた。

レムは残つて、その日泊つていつた。近所の人も、方々から來た親類の者も皆歸つたあと、レムは、父の靈位の前にいつまでも獨り座つて、低い聲で何か詠つてゐた。詠つてゐる文句の中に、

「うらぶれて、袖に涙のかかるとき、人の心の奥ぞ知らるる」

さういふのがあつたのを私は忘れない。御詠歌といふのだつたかも知れないが、節はうかんで來ない。この文句には、のちに出あつたことがあるが、初めて聞いたのはこのときであつた。

——自分たちは、うらぶれたのだらうか、四十代の主人が、世間知らずの妻と二十以下五人の子供をのこして死んだ、これから一家はどうなつて行くのか——世間ではさう見てゐるだらう。この伯母も同じ見方をしてゐるのかも知れない——

だが、さう決めてかかることもないだらう、と私は思つた。その頃すでに私は、いろんな小説を讀んでゐた。袖に涙がかかるときに人の心の奥が知られる、といふやうなことも、大體そんなものだらうと見當はついてゐた。他人の心も、自分の心も、である。私には、父の死によつて、自分が直接（文字を通してでなく）世間とぶつかることに、張りを感ずる、といふ面があつた。

伯母は伯母で、全くつらかつただらうと思ふ。彼女は、十六かの齡に、大山の偶然ながら實家と同姓の家へ嫁した。先導師は御師とも言はれ、大山の場合、阿夫利神社の講中が大山詣りをするとき、これを泊めて參詣の世話をする職業である。また、年末には、阿夫利神社のお札を講中に配つて歩く。神田銅鐵講とか谷中御供物講とかいふ名を私も覚えてゐるが、大山の尾崎家で持つ講中は東京に多かつた。また、伊東とか網代とかの漁業家にも講中があつた。伯母の良人なる人は、ある年の講中廻りで東京へ行つた際、世話人の家で、夜中に腦溢血を起して急死したのだつた。伯母が四十位のときだつたか。

伯母は寡婦になると共に力量を發揮した模様で、息子の一人を若き先導師としてより立てた。郵便局の方もしつかりとやつた。私の父は、伊勢市の神宮皇學館の教師をつとめ、伊勢市（昔の宇治山田町）に獨居してゐたが、暑中休暇で歸ると、一週間ぐらゐは大山へでかけた。私もときに連れて行かれたが、大山の家は涼しくて、盛夏でも蚊帳が要らなかつた。

伯母は、實家のあととりであるただ一人の弟を愛し、また頼りにしてゐた。父もさういふ姉の氣持にこたへて、物心兩面で伯母を扶けてゐた形跡がある。

さういふ伯母にとつて、父の死はつらいことだつたに違ひない。頼る人間が無くなつた、といふ感じは切實だつたらう。また、自分の出た家が、あとどうなつていくかが、氣がかりでならなかつたらう。「うらぶれて——」と繰り返し詠ふ伯母の姿は、もの悲しく見えた。